

Zend Server for IBM i 勉強会 【前編】

2018年9月27日 株式会社オムニサイエンス 田中昌宏



アジェンダ



Zend Server for IBM i 勉強会【前編】

- 1. 導入準備
- 2. 導入・設定
- 3. バージョンアップ・移行
- 4. アプリケーション開発基礎(DBアクセス・プログラム実行)

1. 導入準備

OSバージョン毎のZend Server 対応状況 2018年9月現在



	Zend Server Ver.	2018	9		8		7	6			5		
			9.1	9.0	8.5	8.0	7.0	6.3	6.1	6.0	5.6	5.1	5.0
OS	V7R3	\circ	\circ	\circ	△ 8.5.3 ↑	×	×	×	×	×	×	×	×
	V7R2	\bigcirc	\circ	\circ	\circ	\circ	\circ	×	×	×	×	×	×
	V7R1	\bigcirc	\circ	\circ	\circ	\circ	\circ	\bigcirc	\circ	\circ	\circ	\circ	\bigcirc
	V6R1	×	×	×	×	\circ	\circ	\bigcirc	\circ	\circ	\circ	\circ	\bigcirc
	V5R4	×	×	×	×	×	×	×	×	×	\circ	\circ	\circ
PHP	7.2	0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	7.1	×	\circ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	7.0	×	×	0	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	5.6	×	×	×	0	0	×	×	×	×	×	×	×
	5.5	×	×	×	0	0	0	0	×	×	×	×	×
	5.4	×	×	×	×	×	\circ	0	0	0	×	×	×
	5.3	×	×	×	×	×	×	0	\circ	\circ	0	0	\circ
	5.2	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	0	\circ
ライセンス		7PHPZND 6ZSVRPI						2ZSVRPI					
ネイ		XMLToolkit						i5関数					
日本語有償版		未定	0	×	×	×	0	×	0	×	0	0	0
英語無償版入手可		\circ	0	×	0	×	0	0	×	×	0	×	×
		Copyright 2018 omniscience Co., Ltd. All Rights Reserved.							d /				

導入前提条件



IBM i OS 7.1 / 7.2 / 7.3

License program requirements

1.	Portable App Solutions Environment	33	5770SS1
2.	Qshell	30	5770SS1
3.	IBM HTTP Server for i5/OS	*BASE	5770DG1
4.	IBM Portable Utilities For I5/OS	*BASE	5733SC1
5.	OpenSSH, OpenSST, Zlib	1	5733SC1

Required PTFs



Current PTF Group for 5770DG1 (Check for the latest available PTF group)

■確認方法

- 1.「GO LICPGM」で実行後、「10.導入済みライセンス・プログラムの表示」
- 2. 「F11=オプションの表示」に切り替えてライセンスの存在を確認

5733-SC1の導入方法



- 以下ラベルのメディアを準備します。
 B GROUPx 04 (V7R1~V7R3で共通)
- ② 以下コマンドでライセンス導入を実施します。 ※光メディア装置がOPT01の場合
 RSTLICPGM LICPGM(5733SC1) DEV(OPT01) OPTION(*BASE) RSTOBJ(*ALL) LNG(2924)
 RSTLICPGM LICPGM(5733SC1) DEV(OPT01) OPTION(1) RSTOBJ(*PGM)

【補足】

メディアが無い場合はESDからダウンロード可能(要SWMA契約) 導入にあたり、IPLは必要無し(弊社実績より)

Zend Server 機能について



機能	内容
①実行環境の履歴管理	Zend Server の設定変更履歴を確認できます。障害発生時の原因追跡を助けます。設定をエクスポートしてバックアップし、障害発生時にインポートして設定を復元することもできます。
②Javaブリッジ	PHP からJava のプログラムを効率的に呼び出します。
③アプリケーション・バージョン管理	複数のPHP プログラムをまとめてバージョン管理することができます。アプリケーションを定義すると、モニタリングのルールなどをサーバー単位ばかりではなく、アプリケーション単位でも設定できます。
④アプリケーション負荷分析(Z-Ray)	実行中の関数や、アクセス中のデータベースなどの詳細をブラウザ上に表示します。
⑤静的ページパフォーマンス向上(ページキャッシュ)	ブラウザに表示する主に静的ページ内容をキャッシュします。レスポンス時間の短縮がはかれます。
⑥ジョブキュー	PHP のプログラムをバッチ実行したり、定期的に実行することができます。
⑦イベント監視(モニタリング)	PHP プログラムの実行中にイベント(問題)が発生するか監視します。レスポンスの低下や性能劣化の検出に威力を発揮します。
⑧コードトレーシング	PHP プログラムの詳細な実行履歴を確認する機能です。ボトルネックの発見に役立ちます。
⑨Zend Studio 連携	プログラミング、デバッグ、チューニングなどをZend Studio を使用して行えます。
⑩PHP実行環境	PHP プログラムを実行するエンジン。
⑪データベース連携(DB2等)	IBM i のデータベースや、MySQL など各種のデータベースを利用できます。
①XMLToolkitによるネイティブアクセス	RPG/CL を呼び出したり、スプールやジョブなどのIBM i リソースにアクセスできます。
13イベント記録などの保持期間	イベントおよびコードトレーシングのデータ保持期間は、Edition により異なります。

Zend Server 有償版と無償版の機能差異



大线 台 名		i 償	Doo!o	ニノトンフ切め	
機能 	Enterprise Professional		Basic	ライセンス切れ	
①実行環境の履歴管理	\circ	×	×	×	
②Javaブリッジ	\circ	×	×	×	
③アプリケーション・バージョン管理	0	0	×	×	
④アプリケーション負荷分析(Z-Ray)	\circ	0	×	×	
⑤静的ページパフォーマンス向上(ページキャッシュ)	0	\circ	×	×	
⑥ジョブキュー	0	\circ	×	×	
⑦イベント監視(モニタリング)	0	\circ	\circ	×	
8コードトレーシング	\circ	\circ	0	×	
⑨Zend Studio 連携	0	\circ	\circ	\bigcirc	
⑩PHP実行環境	\circ	\circ	\circ	0	
⑪データベース連携(DB2等)	\bigcirc	\circ	\bigcirc	\circ	
①XMLToolkitによるネイティブアクセス	0	0	0	0	
13イベント記録などの保持期間	無制限	3か月	2時間	×	
14日本語サポート受付	0	0	英語のみ(1年)	×	

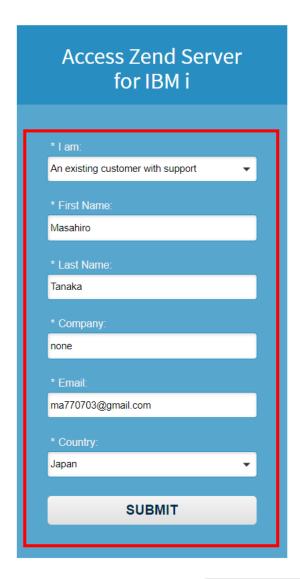
Zend Server 無償版の入手方法 (2018年9月現在)



① 以下のサイトにアクセス

http://www.zend.com/en/solutions/modernize-ibm-i

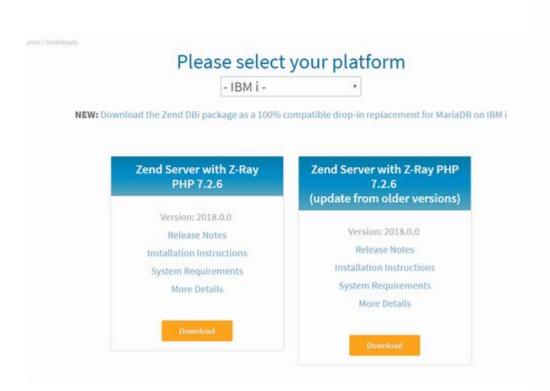
② 右記の通り、必要実行を記入し「SUBMIT」をクリック



Zend Server 無償版の入手方法(2018年9月現在)



③ ダウンロード対象のZend Server, PHPのバージョンを確認して「Download」をクリック



Product Version Format/Size Resources MD5 Checksum Download View Instructions Zend Server with Z-Ray System 9.1.5 ZIP 75e6a94da453679b4ecd42c7019eedf5 PHP 7.1.21 Requirements Release Notes View Instructions Zend Server with Z-Ray PHP 7.1.21 System 9.1.5 ZIP 427f3285454e014687b437ce1cf893fd (update from older versions) Requirements Release Notes View Instructions Zend Server with Z-Ray System ZIP 47b9c1681e44a1d065b06e4bc04ce840 8.5.10 PHP 5.6 Requirements Release Notes View Instructions Zend Server with Z-Ray for PHP 5.6 System 8.5.10 ZIP 593f9177ce63fe616fe8b1eb0a055c81 (upgrade only) Requirements Release Notes Other Resources . What's New in Zend Server · Z-Ray on Existing PHP stacks · Zend Server Security and Common Vulnerabilities and Exposures (CVE) **Download Older Versions** Looking for LTS releases? > Download older versions

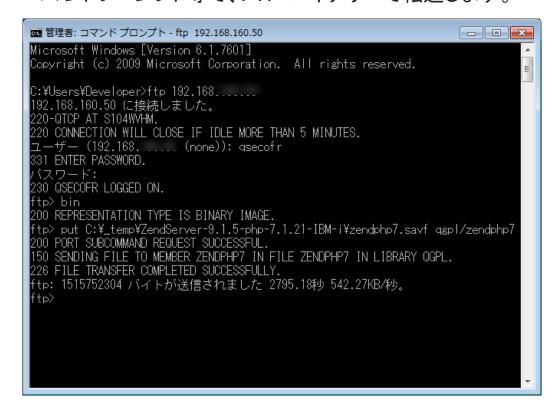
Additional Downloads

旧バージョンもダウンロード可能

2. 導入 · 設定

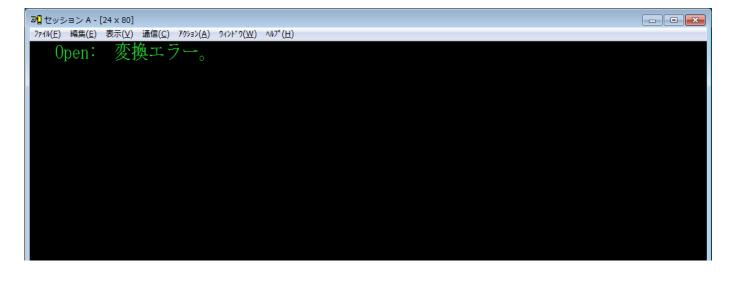


- エミュレータから以下コマンドでSAVFを作成します。
 CRTSAVF FILE(QGPL/ZENDPHP7) TEXT('Zend Server 9 product save file')
- ② ダウンロードしたsavf をIBM i にFTPでアップロードします。 ※ファイルサイズは約1.4GB コマンドプロンプト等で、FTP バイナリーで転送します。



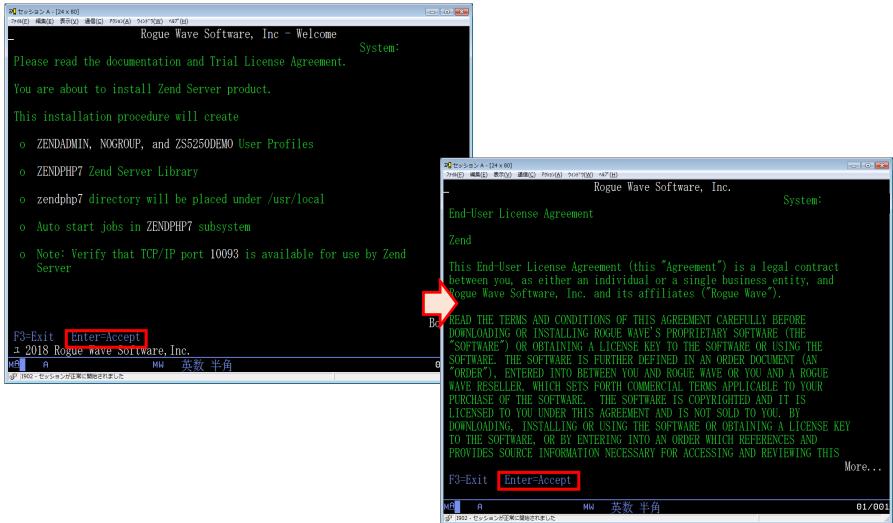


- ③ エミュレータをホストコードページ:939で起動し、SECOFR権限でサイン・インします
- ④ ジョブの「CCSID」を確認し、5035,1399以外の場合は5035に変更します。CHGJOB CCSID(5035)
- ⑤ 以下導入コマンドを実行します RSTLICPGM LICPGM(7PHPZND) DEV(*SAVF) SAVF(QGPL/ZENDPHP7) 以下の「Open変換エラー」メッセージが表示されますが、画面操作せずそのまま待ちます。



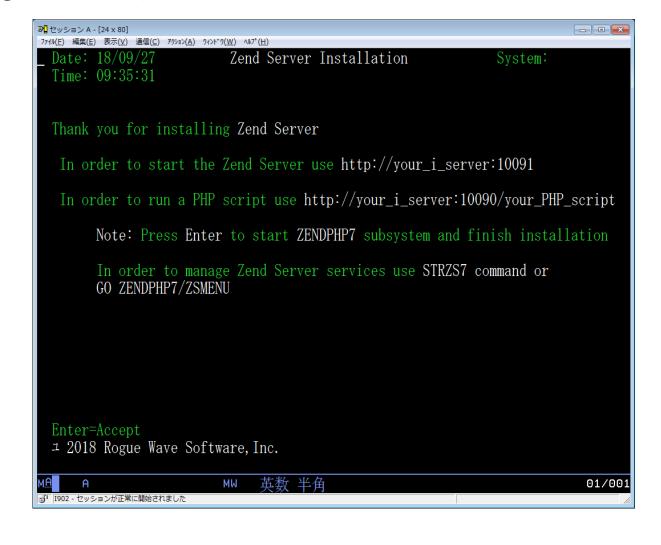


⑥ 以下画面が表示されたら、実行キーを押下し、インストールが完了するのを待ちます。





⑦ 以下画面が表示されインストールが完了、実行キーを押下します。





① IBM i の「QCCSID」が5035,1399以外の場合はユーザー「ZENDADMIN」の「CCSID」を 以下コマンドで5035に変更します

CHGUSRPRF USRPRF(ZENDADMIN) CCSID(5035)

【補足】

ユーザー「ZENDADMIN」の「CCSID」が5035,1399以外の場合、 サブシステム: ZENDPHP7以下のジョブが正しく起動しません。

② 同じく、IBM i の「QCCSID」が5035,1399以外の場合はユーザー「QTMHHTTP」の「CCSID」を 以下コマンドで5035に変更します

CHGUSRPRF USRPRF(QTMHHTTP) CCSID(5035)

【補足】

既にIBM HTTP SERVER以下でWebアプリケーションを「QTMHHTTP」で 稼働させている場合は既存アプリケーションへの影響を考慮する必要があります。



③ 以下コマンドでZendServerを再起動します。

【停止】

ENDSBS SBS(ZENDPHP7) OPTION(*IMMED)

ENDTCPSVR SERVER(*HTTP) HTTPSVR(ZENDPHP7)

【起動】

STRTCPSVR SERVER(*HTTP) HTTPSVR(ZENDPHP7)

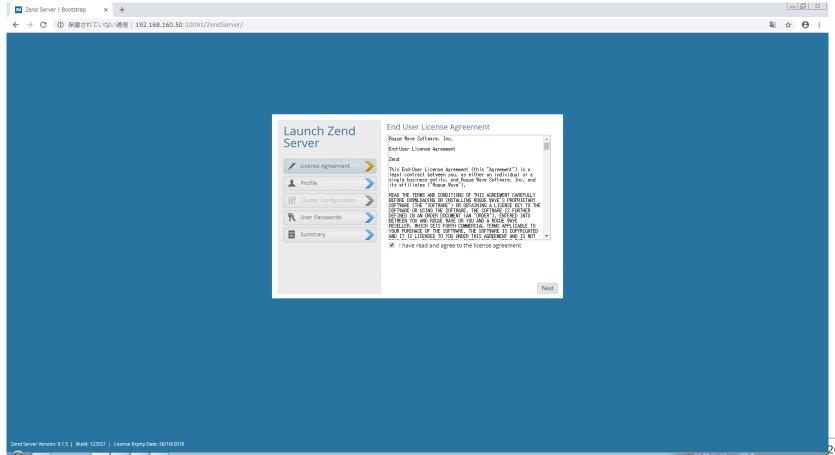
STRSBS SBSD(ZENDPHP7/ZENDPHP7)



④ ブラウザから以下のWeb管理画面URLにアクセスし、画面の内容に従い初期設定を行います。

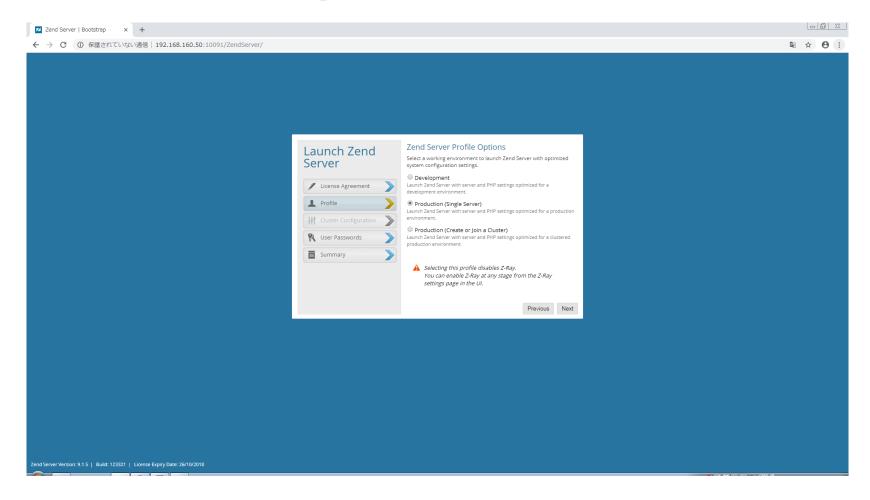
http://IBM iのIPアドレス:10081/ZendServer/

※ブラウザによっては正しく表示されない可能性があります。



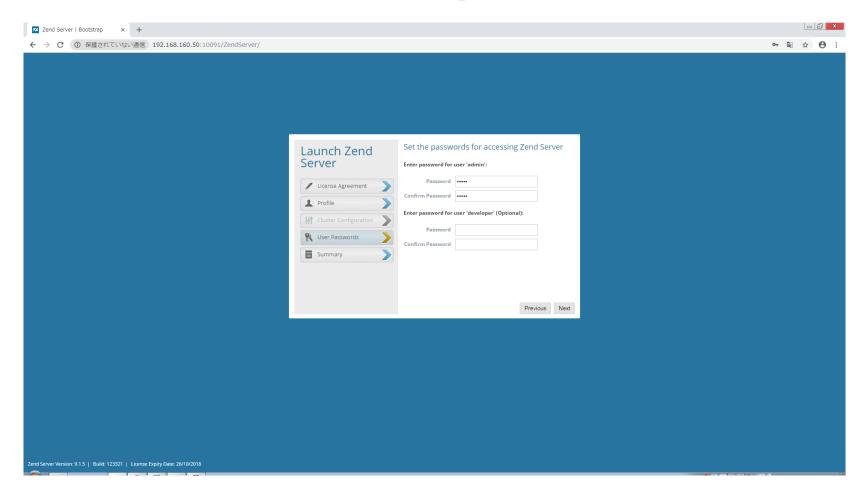


⑤ 初期稼働モードを選択して、「Next」をクリックします。



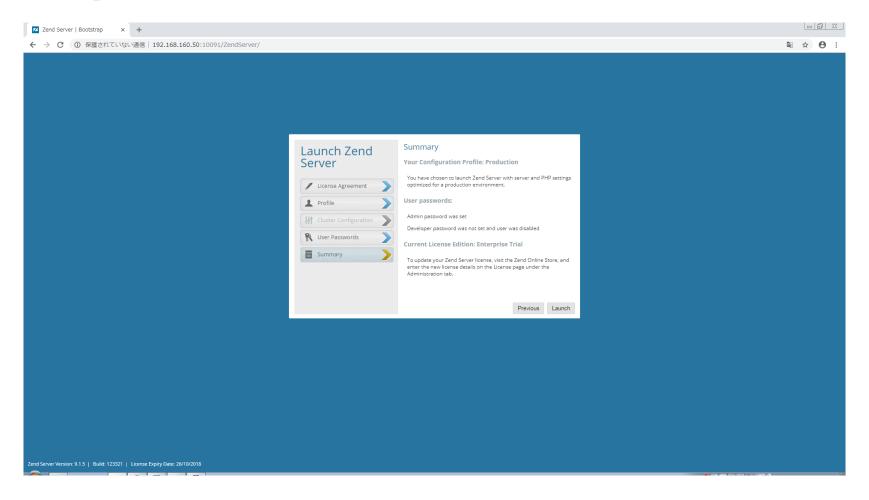


⑥ 初期管理者、開発者パスワードを設定して、「Next」をクリックします。

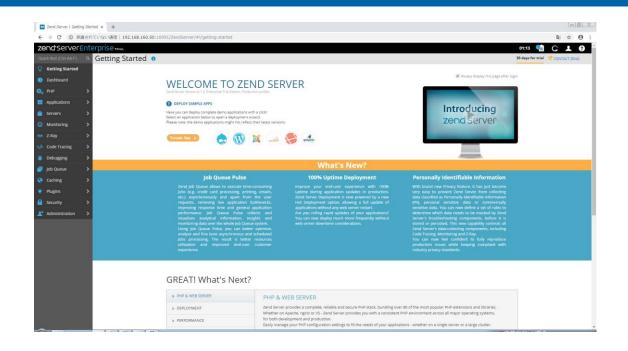




⑦「Launch」をクリックして、初期設定が完了するのを待ちます。







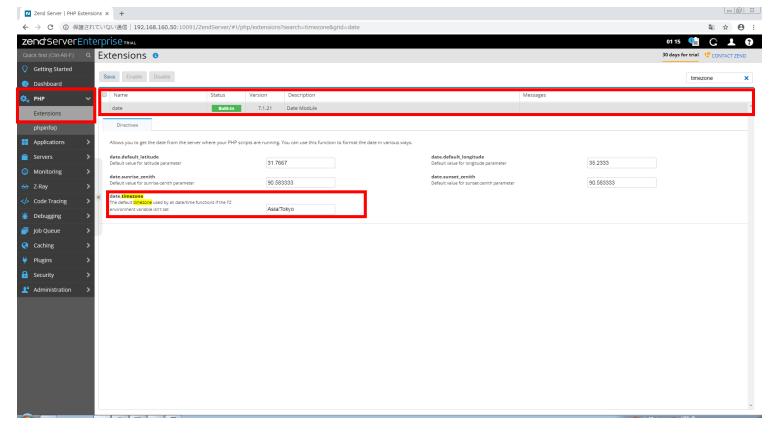
【補足】

無償版の場合、インストールから30日で同管理画面にアクセスできなくなりますが、 その後の設定変更は設定ファイルを直接メンテナンスすることで可能です。

過去はマシンシリアルの提示で1年間のBASICライセンスがその場で取得できましたが、 現在はBASICライセンスの取得についても、RogueWaveとコンタクトをとる必要があります。



⑧ Web管理画面より、PHPのタイムゾーン(timezone)の設定を「Asia/Tokyo」変更して、「Save」します。

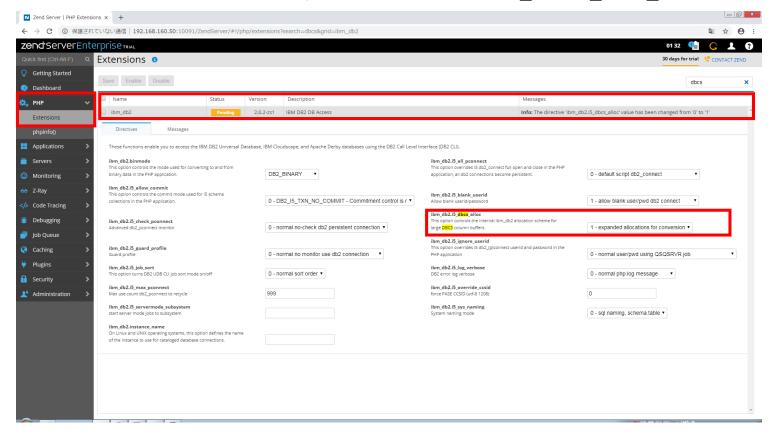


【補足】

タイムゾーンが正しく設定されていないと、PHPログ日時やPHP処理上のシステム日付が正しく取得できません。



⑥ Web管理画面より、PHPのDB2拡張アロケーション(ibm_db2.i5_dbcs_alloc)の設定を「1」にして、「Save」します。



【補足】

dbcs_allocが正しく設定されていないと、SQLでデータ取得時に全角文字について文字化けが発生する可能性があります。



⑦ httpd.confを以下の通り変更します。

エミュレータをホストコードページ:939で起動し、以下のコマンドでファイル編集を開始します。

CHGJOB CCSID(5035)

EDTF STMF('/www/zendphp7/conf/httpd.conf')

【修正内容】

(22行目)

DefaultFsCCSID 37

CGIJobCCSID 37

 \Rightarrow

DefaultFsCCSID 5035

CGIJobCCSID 5035

DefaultNetCCSID 943

F3キーで変更/終了します。



toolkit.iniを以下の通り変更します。

エミュレータをホストコードページ:939で起動し、以下のコマンドでファイル編集を開始します。

CHGJOB CCSID(5035)

EDTF STMF('/usr/local/zendphp7/share/ToolkitAPI/toolkit.ini')

【修正内容】

(25行目)

encoding = "ISO-8859-1"

encoding = "UTF-8"

F3キーで変更/終了します。

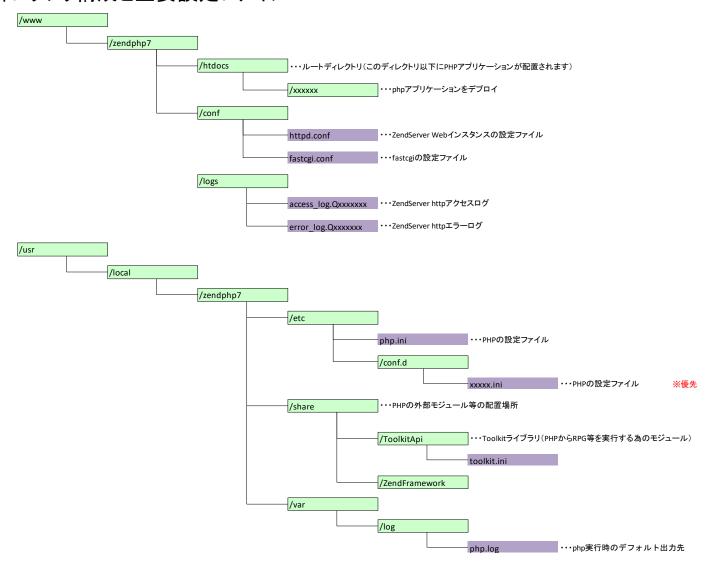
再度、Zend Serverを再起動します。※③同様

26

OSS, Open Source 協議会 IBM i

導入後の環境について

● ディレクトリ構成と主要設定ファイル



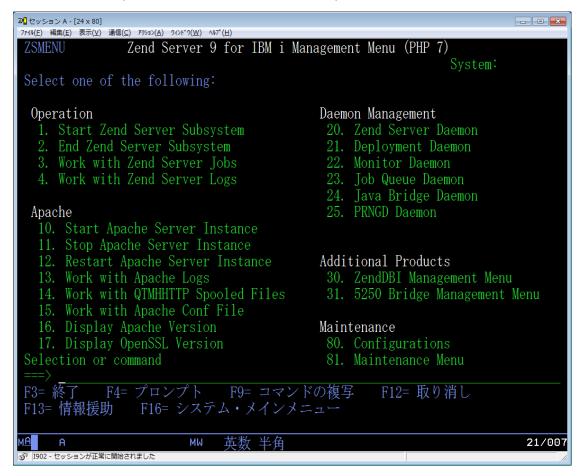
導入後の環境について



エミュレータ管理画面

以下コマンドでエミュレータ管理画面が起動します。

GO MENU(ZENDPHP7/ZSMENU)



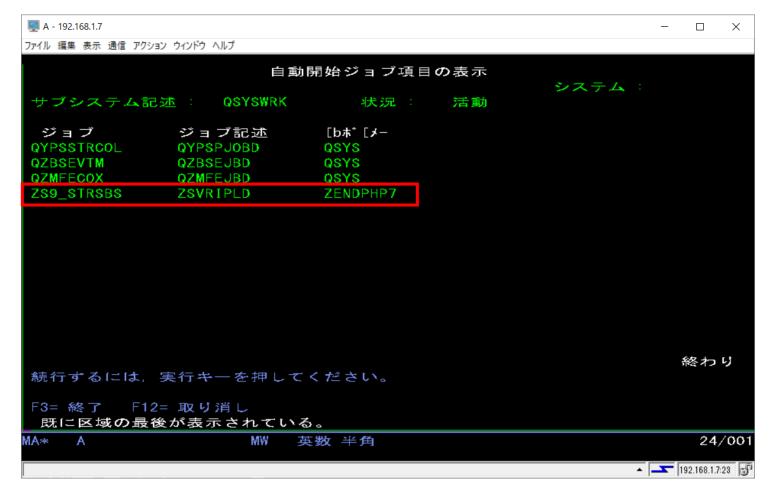
導入後の環境について



● IPL時の自動起動について

IPL時のZend Serverの自動起動はインストール時に、

サブシステム: QSYSWRKの自動開始ジョブ: 「ZS9_STRSBS」として登録されます。



簡単にできるパフォーマンスアップ術



- opcacheの利用
 - ➡PHPコードをコンパイルしてキャッシュメモリーに保存する仕組みで、PHP5.5以上のZend Serverで利用可能。
 フレームワークで構築されたアプリケーションに効果大。

- PHP7.0~(Zend Server 9以降) へのバージョンアップ
 - ➡PHPエンジン自体の処理速度の向上 体感で1~2割程度のパフォーマンスアップが期待できる。

簡単にできるパフォーマンスアップ術



- Webサーバーのチューニング
 - ・コンテンツ圧縮(Webサーバー⇔ブラウザ間の転送速度の向上)
 - ・キープアライブ設定(Webサーバー⇔ブラウザ間の接続オーバーヘッドの回避)

【設定内容】 httpd.confの変更

LoadModule deflate module /QSYS.LIB/QHTTPSVR.LIB/QZSRCORE.SRVPGM

KeepAlive On

MaxKeepAliveRequests xx

KeepAliveTimeout xx

SetOutputFilter DEFLATE

3. バージョンアップ・移行

バージョンアップが必要なケース



① OSのバージョンアップに依存
OSのバージョンアップにより、対応するZend Server自体のバージョンアップが
必要になるケースがある。

② PHP自体のバージョンアップを希望

PHPサポート切れの懸念。

使いたいライブラリーが今のバージョンに対応していない。

例えば、PHPExcelをやめて PhpSpreadsheet(PHP5.6以上)に移行したい...等

バージョンアップ時の留意点



● 旧i5_関数のXMLToolkitへの置き換え

- ・コンパチビリティーラッパー(CW)の利用
- •Toolkitで利用できない以下関数の置き換え

i5_query

i5_fetch_row

i5_free_query

参考)

https://qiita.com/kagesta/items/08c17fe83d278e3f87c4

バージョンアップ時の留意点



● PHPバージョンアップによる影響調査・修正・稼働確認

チェックツールの利用

参考)

https://qiita.com/You_name_is_YU/items/b8c9b7adb28d0739e318

バージョンアップ時の留意点



- その他の留意事項
 - ・ライセンス(7PHPZND,6ZSVRPI,2ZSVRPI)が異なる場合、同マシン上で環境共存可能。
 - ・マシンリプレイス時は再インストールが無難。
 - ・OSのみバージョンアップ時は、対応バージョンであれば基本的に問題無し。

4. アプリケーション開発基礎

アプリケーション開発基礎



ZendServer for i を導入することにより、IBM i上でPHPを扱うことが可能となりますが、アプリケーションを構築する際には、単純にPHPを扱うだけでなく、IBM i 内の既存資産であるデータ(DB2/400)やプログラム(RPG等)とPHPとの連携が重要です。

ZendServer for IBM iでは、IBM i上で稼動するあらゆるシステム資産との豊富な連携機能が標準で用意されており、 比較的簡単に利用できるようになっています。

アプリケーション開発基礎



PHPからIBM i上のDBやCL,RPGなどのプログラムを扱う方法として以下が存在します。

〈データベース操作〉

•IBM_DB2関数

〈CLやRPGの実行〉

- •XML Toolkit for IBM i
- ・ストアドプロシージャ

それぞれの特徴と利用方法について説明していきます



●IBM_DB2関数

IBM_DB2関数はPHPで使用できるDB2固有のAPIです。 以下の特徴を備えています。

- ➤ IBM系データベースへの接続をサポート
- ➤ Zend Server for IBM iでは標準で利用可能
- ⇒ データベースアクセスのための各種関数を提供
- ▶ パフォーマンス向上のため効率化が行われている



●IBM_DB2関数使用の手順

IBM_DB2関数を使用するためには、PHP上から以下の手順に従って処理を実行します。

- 1. db2 connectを使用して接続する
- 2. 任意のdb2関数を実行し処理を行う
- 3. db2_closeを使用して接続を解除する



《サンプル》(IBM DB2関数を用いたデータの抽出、出力)

```
<?php
  //データベースへの接続
  $db=db2 connect('*LOCAL', 'USER', 'PASSWORD',
        array('i5_naming'=>DB2_I5_NAMING_ON,
              'i5 libl'=>'QGPL QTEMP TESTLIB'));
  //SQLのセット
  $sql = "select * from TESTLIB/ADRMSP";
  //SQLの実行
  stmt = db2_exec($db,$sql);
  //データの読み込み、最終行まで繰り返し
  while ($row = db2 fetch assoc($stmt)) {
    echo($row['ADCODE']."<br>");
    echo($row['ADNAME']." <br>");
  //データベースへの接続解除
  db2 close()
?>
```



●データベースへの接続(db2_connect)

\$db=db2_connect('*LOCAL', 'USER', 'PASSWORD',

array('i5_naming'=>DB2_I5_NAMING_ON, 'i5_libl'=>'QGPL_QTEMP_TESTLIB'));

接続オプション

接続先ホスト、ユーザーID、パスワード

※接続先ホスト、ユーザーについて ホストには*LOCALを指定します ユーザーはIBM i のユーザープロファイルに従います。 ユーザーIDとパスワードを省略した場合、「QTMHHTTP」という

デフォルトのWeb固定ユーザーとして、接続されます。

※接続オプションについて

db2_connectの実行時、接続の振る舞いを指定することができます。

同時に複数のオプションを指定することもできます。

IBM i 独自に使用可能な接続オプションは"i5"からはじまります。

上記の「i5_libl」はライブラリリストを指定しています。

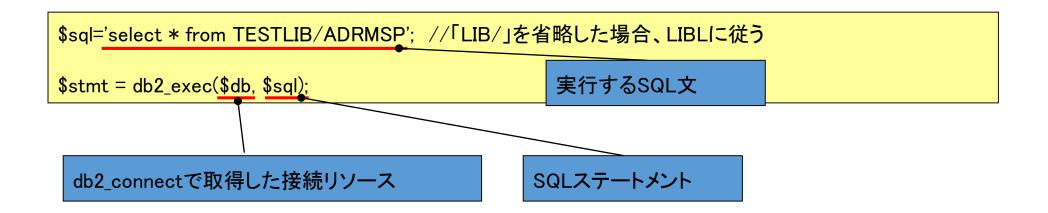
「i5_naming」はライブラリリストを使う為のオプションです。



●SQLの実行(db2_exec)

DBに接続した後、db2_execにSQLステートメントをセットしデータの選択、更新、削除等を行います。

※select文を実行すると実行結果(ステートメントリソース)が戻り値にセットされます。update、delete文の場合、成功はtrue、失敗はflaseを返します。

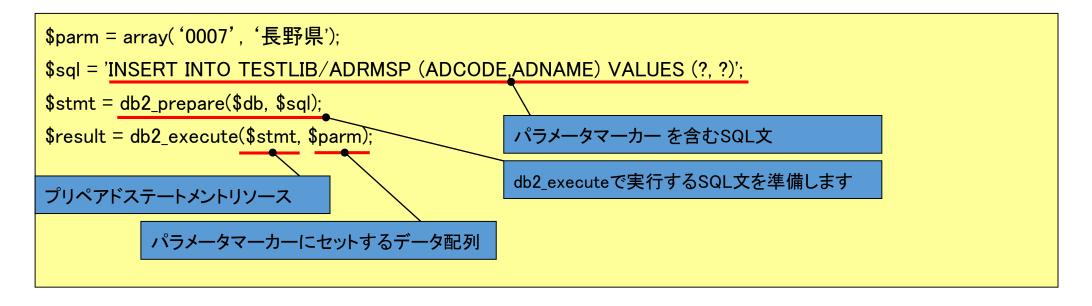




●プリペアドステートメントの実行

プリペアド(実行可能状態に準備済みの)ステートメントを使用してSQLを実行する事も可能です。db2 prepareでSQLを準備し、 db2 executeで実行します。

※プリペアドステートメントの使用により、SQLインジェクション(パラメータとしてSQL文の断片を与え、データの改ざんや不正入 手を行うこと)を防ぎ、セキュリティ面での性能も向上します。



45



●データの取得

select文を実行し取得した実行結果(ステートメントリソース)からデータの取得をするには以下の3つの方法があります。

db2_fetch_array

→フィールド順の添字を持つ添字配列にデータがセットされます。

db2_fetch_assoc

→フィールド名の名前を持つ連想配列にデータがセットされます。

db2 fetch both

→添字配列、連想配列の両方で配列にデータセットされます。

- ※db2_fetch_arrayの添字は0からはじまります。
- ※db2_fetch_bothはdb2_fetch_arreyとdb2_fetch_assocの両方の機能を持っていますが、処理速度は若干遅くなります。



●データの取得

	ADCODE	ADNAME		db2_fetch_asso
	0001	北海道		array(2)
	0002	青森県		{
	0003	岩手県		['ADCODE']
	0004	宮城県)	['ADNAME']
	0005	秋田県		1
	0006	山形県		
				db2_fetch_bd
db2_fetch_array()				array(4)
array(2) { [0]=> string(4) "0001 ",				['ADCOD [0]=> stri
[1]=> string(12) "北海道"				[1]=> str

```
oc()
']=> string(4) "0001",
']=> string(12) "北海道"
```

oth()

```
DE']=> string(4) "0001",
       ring(4) "0001 ",
       ME']=> string(12) "北海道",
[1]=> string(12) "北海道"
```



●データベースからの接続解除

db2_connectで接続したデータベースとの接続を解除する場合、db2_closeを使用します。

db2_close(\$db);

アプリケーション開発基礎 -XML Toolkit for IBM i



ZendServer for IBM iには、「XML Toolkit for IBM i」というPHPからIBM i ヘアクセスし、各種機能を使用するための関数がオープンソースとして組み込まれています。

この関数により IBM i との緊密な連携を実現し、既存のRPGやCLで作成した資産を活かしつつ、PC上の新しい資産との連携が可能となります。

アプリケーション開発基礎 -XML Toolkit for IBM i



XMLToolkit for IBM iを使用するには、PHP上から以下の手順に従って処理を実行します。

- 1. ToolkitService.php(外部ファイル)を呼び出す
- 2. db2_connectを使用して接続する
- 3. ToolkitService::getInstanceを使用してToolkit用の接続を開始する
- 4. 任意の関数を実行する
- 5. disconnect()を使用してToolkit用の接続を解除する
- 6. db2_closeを使用して接続を解除する



```
<?php
  // XMLToolkitライブラリの呼び出し
  require once('ToolkitService.php');
  // データベースへの接続
  $db=db2 connect( '*LOCAL', 'USER', 'PASSWORD',
    array('i5 naming'=>DB2 I5 NAMING ON,'i5 libl'=>'QGPL QTEMP TESTLIB'));
  // Toolkit接続(データベース接続と共有)
  $conn = ToolkitService::getInstance($db, DB2 I5 NAMING ON);
  $conn->setToolkitServiceParams(array('stateless' => true));
  // CLコマンドの実行
  $conn=>CLCommand('ADDLIBLE LIB(TESTLIB2)'):
  // パラメータ定義
  $parm∏ = $conn->AddParameterChar('Both', 1, 'FLG', 'FLG', '1'):
  // プログラム実行
  $result = $conn->PgmCall('SAMPLE_01C', '*LIBL', $parm, null, null);
  // 出力パラメータの取得
  $num = $result['io_param']['FLG'];
  // Toolkit切断
  $conn->disconnect():
  // データベース切断
  db2 close($db);
?>
```



●Toolkit接続(データベース接続と共有)
db2_connect接続を介してToolkit用の接続を開始します

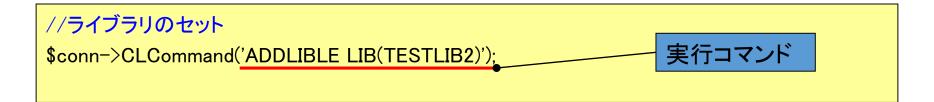
```
// データベースへの接続
$db=db2_connect('*LOCAL', 'USER', 'PASSWORD',
              array('i5_naming'=>DB2_I5_NAMING_ON,
                   'i5 libl'=>'QGPL QTEMP TESTLIB')):
// Toolkit接続(データベース接続と共有)
$conn = ToolkitService::getInstance($db, DB2_I5_NAMING_ON);
$conn->setToolkitServiceParams(array('stateless' => true));
                                        ライブラリリストを利用する為の指定
共有するデータベース接続リソース
         ステートレスを有効化
         ※ステートフルの場合、データベース接続と同じジョブにならない
```

Copyright 2018 omniscience Co., Ltd. All Rights Reserved.

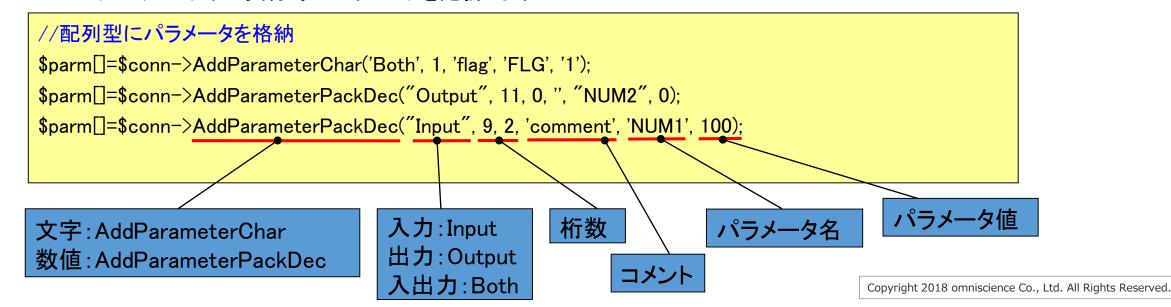


●コマンドの実行

CLで実行可能なコマンドを実行します。

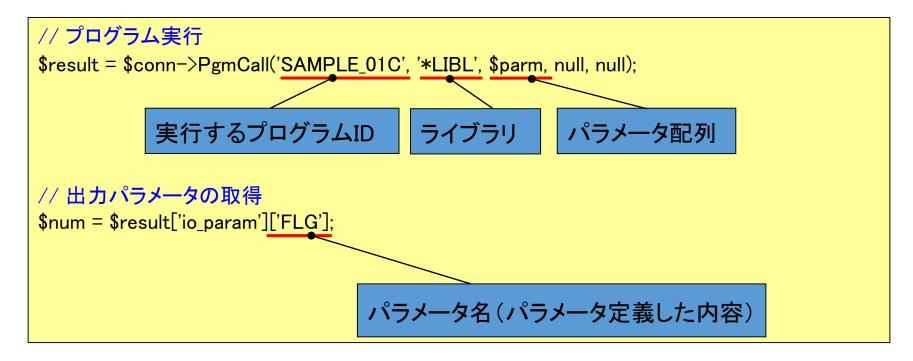


●プログラムパラメータの定義 CL(RPG)プログラム実行時のパラメータを定義します





●プログラムの実行 CL(RPG)プログラムを実行します



●Toolkitの接続解除 ToolkitService::getInstanceで接続した接続を解除

\$conn=>disconnect();

アプリケーション開発基礎 -ストアドプロシージャ



Toolkitを利用する以外に、IBM_DB2のストアドプロシージャの機能を利用して、CLやRPGプログラムをPHPから実行することもできます。

ストアドプロシジャーを利用するには、最初にプロシージャ定義を作成する必要があります。 また、プログラムインターフェイスに変更があった場合、 プロシージャを再作成する必要があります。

アプリケーション開発基礎 -ストアドプロシージャ



●ストアドプロシージャ の使用手順

ストアドプロシージャを使用するには、以下の手順に従います

<準備> ※STRSQL, System i ナビゲータ等を利用 CREATE PROCEDUREを使用してプロシージャ定義を 作成します。既に存在する場合はDROP PROCEDURE で一旦削除してから再定義します。

<PHP>

- 1. db2_connectを使用して接続する
- 2. SQL(CALL プロシージャ名)の実行
- db2_closeを使用して接続を解除する

《サンプル》ストアドプロシージャ用いたCL(RPG)の実行



```
<?php
  // データベースへの接続
  $db=db2 connect( '*LOCAL', 'USER', 'PASSWORD',
    array('i5_naming'=>DB2_I5_NAMING_ON,'i5_libl'=>'QGPL_QTEMP_TESTLIB'));
  //プロシージャ実行準備
  $stmt = db2 prepare($db, "CALL SAMPLE 01P(?.?)");
  //プロシージャへのパラメータバインド
  param 1 = '00001':
  param2 = 0:
  $param3 = ":
  db2 bind param($stmt, 1, "param1", DB2 PARAM IN);
  db2_bind_param($stmt, 2, "param2", DB2_PARAM_OUT);
  db2 bind param($stmt, 3, "param3", DB2 PARAM INOUT);
  //プロシージャ実行
  $ret = db2 execute($stmt):
  //成功した場合、戻り値の格納
  if($ret){
    $return val1 = $param2;
    $return val2 = $param3;
  /* ~ SQLの実行等 ~ */
  // データベース切断
  db2 close($db);
```

アプリケーション開発基礎 -ストアドプロシージャの作成



●STRSQL•System i ナビゲータ等でCREATE PROCEDURを実行します

《プロシージャの削除》

DROP PROCEDURE <u>TESTLIB/SAMPLE_01P</u> プロシージャ名 《プロシージャの作成》 プロシージャ名 CREATE PROCEDURE TESTLIB/SAMPLE_01P(IN PARM1 CHAR (5). パラメータ定義 OUT PARM2 DEC(3,0), 入出力 パラメータ名、型(桁数) **INOUT PARM3 CHAR (1)** の形式で定義 LANGUAGE CL NOT DETERMINISTIC NO SQL EXTERNAL NAME TESTLIB/SAMPLE_01C PARAMETER STYLE GENERAL 呼出プログラムの言語(CL,RPG等) 呼出プログラムの指定

アプリケーション開発基礎 -ストアドプロシージャの実行



●プロシージャの実行準備

```
//プロシージャ実行準備

$stmt = db2_prepare($db, "CALL TESTLIB/SAMPLE_01P(?,?,?)");

CALL プロシージャ名(パラメータマーカー)
```

●プログラムパラメータのバインド CL(RPG)プログラム実行時のパラメータをセットします

```
//プロシージャへのパラメータバインド

$param1 = '00001';

$param2 = 0;

$param3 = ";

db2_bind_param($stmt, 1, "param1", DB2_PARAM_IN);

db2_bind_param($stmt, 2, "param2", DB2_PARAM_OUT);

db2_bind_param($stmt, 3, "param3", DB2_PARAM_INOUT);
```

パラメータ順(1~)

パラメータ名(PHP変数名と合わせる) \$+パラメータ名=PHP変数名 入出力定義

アプリケーション開発基礎 -ストアドプロシージャの実行



●プロシージャの実行 CL(RPG)プログラムを実行します

```
//プロシージャ実行
$ret = db2_execute($stmt);
//成功した場合、戻り値の格納
if($ret){
$return_val1 = $param2;
$return_val2 = $param3;
}

バインド時に定義したパラメータ名に
先頭'$'をつけた変数に戻り値が格納される
```